

第5回日本貿易会賞懸賞論文 優秀賞

グローバル資本主義への処方箋 ― 経済騎士道は日本より甦るか

茂木 創 (もてぎ はじめ) (日本 37歳)

(要旨)

1980年代後半に始まる経済のグローバル化は、時を同じくする情報技術の発達を触媒として、国境を越えた財やサービス、資本、労働の移動をこれまでにない速さで拡大させた。今やわれわれの生活は、グローバル化された経済の恩恵なしには成立し得ない状況にある。その一方で、グローバル化の負の側面、つまり危機の国際的波及も大きな問題となっている。各国は繰り返される国際危機の度に経済政策を行うが、抜本的な解決とは言い難い状況である。本稿は、グローバル資本主義を修正するための処方箋として、A・マーシャルのいう「経済騎士道」や澁澤栄一の「士魂商才」といった公共的精神の重要性を指摘し、その可能性について論じたものである。

グローバル化の現状をみると、企業は狭量な利殖に奔走し、政府は急場しのぎの政策対応をしている。この状況はA・マーシャルや澁澤栄一が公共的精神の重要性を指摘した100年前と酷似している。にもかかわらず、今日、なぜ「経済騎士道」や「士魂商才」の精神が醸成されなかったのであろうか。逆説的ではあるが、第二次世界大戦前の社会の特徴である「貧富の格差」が戦後是正されたことによって、逆に企業家の公共的精神が失われていったと私は考える。戦前の日本においては、資本家になるということは非常に難しかった。そうした社会的な制約の中で、企業家は己の仕事に対して誇りを持ち、雇用者のみならずその家族、地域社会、ひいては日本の国益に対しても責任をもっていた。わが国の資本主義形成の過程では、公共的精神の重要性を説いた企業家が数多く存在した。グローバル資本主義を修正する鍵は、「制度化された経済学」を用いた経済政策ではなく、むしろ各経済主体の経済に対する考え方の修正、すなわち、公共的精神をもった経済活動を行うことにあると考える。日本には武士道に基づく「士魂商才」の発想があった。日本において「経済騎士道」が甦る可能性は低くはない。

(本文)

「グローバル資本主義への処方箋—経済騎士道は日本より甦るか」

はじめに

1980年代後半に始まる経済のグローバル化は、時を同じくする情報技術の発達を触媒として、国境を越えた財やサービス、資本、労働の移動をこれまでにない速さで拡大させた。今やわれわれの生活は、グローバル化された経済の恩恵なしには成立し得ない状況にある。

八百屋を覗けば南洋の見知らぬ果実が店頭を飾り、街角の洋食屋は専門化して各国のシェフがその腕を競いあう。刺激に満ちた海外の文化や生活様式に接する機会が増加し、欲望を満足させるという意味では、われわれはかつてない繁栄を謳歌している。グローバル化の恩恵—「陽」の部分である。

その一方で、グローバル化に伴って国や地域の障壁が希薄化したために、地球の裏側で起こった些細な出来事が、一国の経済に甚大な危機となって波及するようになった。これはグローバル化に伴う「陰」(闇)の部分といえよう。アジア通貨危機(1997年)や国際金融危機(2008年)に代表されるように、一国の経済変動は瞬時に世界に伝播する。ブラジルの蝶の羽ばたきがテキサスでトルネードを巻き起こすことはもはや警句ではない。

四方を海に囲まれた日本は、古えより「海」が緩衝機能を果たしてきた。海があるがゆえに、大陸の災いが伝播するまでに経済的費用が発生し、その被害は最小限に抑えられてきたのである²。しかし、グローバル化の進展は「海」のもつ緩衝機能を奪い、その結果、危機の伝播を容易にしている。「海」に代わる緩衝機能を構築し、危機への対応に備えなければ、グローバル化の「闇」は瞬時にわれわれの生活を覆い尽くす危険性がある。

グローバル化の「陽」の光が大きければ大きいほど、その「闇」もまた深刻である。1990年以降は金融・通貨に関する国際的な危機が頻発している。2008年の国際金融危機は、事態が資本主義の聖地米国を震源地としていたことで、世界経済に与えた影響は甚大であった。2007年に5.2%だった世界経済成長率は、2008年には3.2%に減少し、2009年にはマイナス1.3%という見通しもある³。被害の大きかった欧米はもとより、各国政府は協調的な財政支出によって有効需要を創出する政策を採用した。半世紀を振り返れば、経済危機が発生するたびに、(程度の差こそあれ)われわれは「制度化された経済学」の処方箋—すなわち、ケインズ流の拡張的財政金融政策—を採用してきたといえる。厳密にいえば、「それ以外の手法をわれわれは持っていない」というべきかもしれない。

しかし、経済政策効果の信憑性に対する懐疑は常にわれわれに付きまとっている。実際、理論上きわめて頑健な正の効果をもたらす政策ですら、政策の効果について現実経済のデータを用いてこれを検証することは極めて難しく、経済政策に関する実証的な有効性に関しては、理論上の有効性に関してかなり脆弱であることも事実である。現実経済は理論とは異なり、外生変数(たとえば天候、政治活動、宗教、他の国の経済活動など)が内生変数(たとえばGDPや物価など)に多大な影響を与える場合も多いからだ。

¹ ローレンツ (E. Lorenz) が 1972 年、アメリカ科学振興協会で行った講演のタイトル "Predictability: Does the Flap of a Butterfly's Wings in Brazil set off a Tornado in Texas?" に由来する。

² 茂木 (2008) を参照のこと。

³ IMF (2009) を参照のこと。

⁴ 佐和 (1982) を参照のこと。

今後さらに経済がグローバル化していくことが疑いないとすれば、それと背中合わせに拡大する国際的な危機に対してわれわれは今後も「制度化された経済学」の処方箋を利用し続けることになる。危機と政策の「無限の魴（いたち）ごっこ」である。

しかし、市場で発生した問題の解決を政府だけに委ねてよいという道理はない。高齢化社会を迎え、社会保障をはじめとする公共サービス供給が逼迫する中、公債依存度が高いわが国の財政に過剰な期待をすることは現実軽視の誹りを受けかねまい。経済政策の効果に対する疑問や、そもそも経済理論における仮定の非現実性、現実への応用の難しさなどを考えてみても、危機の対応を事後的に政府に過剰に委ねるのではなく、危機を未然に防ぐために、企業行動について再検討することが急務である。

本稿では、以上のような現状を踏まえた上で、第1節では、グローバル化の現状についての述べ、今日のグローバル化された資本主義⁵が果たしてわれわれの目指した資本主義であったか否かについて考察する。そして、グローバル資本主義が陥った闇について議論し、第2節ではその原因について、企業と政府の視点から考察を試みる。そこではマーシャルの「経済騎士道」の概念について取り上げる。第3節ではグローバル資本主義を修正するための視点として、澁澤栄一の「士魂商才」の概念を取り上げ、第4節ではグローバル資本主義の中で日本が果たすべき役割について言及する。

1. グローバル資本主義が陥った闇—グローバル資本主義は我々が目指した資本主義か

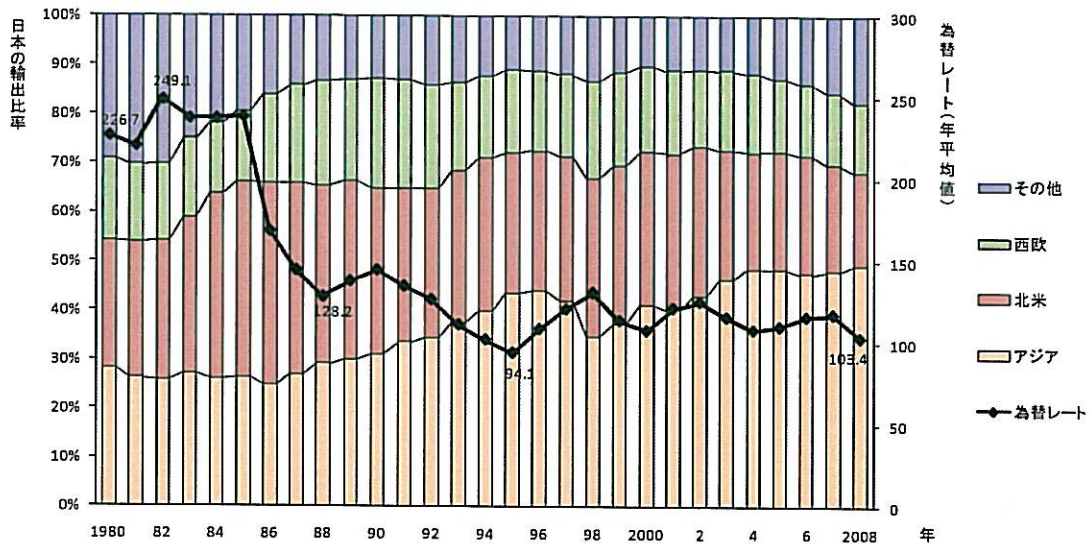
グローバル化とは、資本や労働力の国境を越えた移動が活発化するとともに、貿易を通じた商品・サービスの取引や、海外への投資が増大することによって世界における経済的な結びつきが深まることである⁶。わが国が経験した1980年代後半以降のグローバル化の最大の特徴は、為替レートの急速な増価とアジア諸国・地域との貿易・投資依存関係の深化という2点に集約できる。

図には日本の輸出比率と為替レートの推移が示されている。1980年代前半には1ドル230円前後で推移していた為替レートは、1985年のプラザ合意を契機として急速に切り上がり、1990年代以降、日本は平成不況（失われた10年）に見舞われながらも、円の相対的な価値は下がらず、2009年現在、1ドル100円前後で推移している。

⁵ 以降、グローバル資本主義と称すことにする。

⁶ 内閣府（2004）p.149.

図 日本の輸出比率と為替レート推移



資料) IMF, International Financial Statistics
財務省『貿易統計』より筆者作成。

貿易相手国も北米からアジアへと大きく変化した。中でも対中国貿易が著しく増加している。1990年には日本総輸出に占める米国への輸出割合は31.5%、中国へは2.1%でしかなかった。しかし2008年になると、米国への輸出割合は17.5%に低下し、中国への輸出割合は16.0%へと増加した⁷。

貿易だけではない。急速な円高によって日本の製造業は比較優位を失い、労働コストの廉価なアジアでの生産を行うようになった。その結果、原料を輸入してそれを加工し、欧米を中心に最終財を輸出するという垂直的な貿易構造は、比較優位の観点から分散されたアジア諸国における生産拠点が互いに中間財を取引するという水平的な貿易構造へと変化した。近年は、国籍を異にする企業がそれぞれの得意とする工程を分担し、取引費用を最小化するサプライ・チェーンの構築（フラグメンテーション）も顕著である。

アジア地域に分散化された生産拠点は、労働コスト、インフラ水準、操業コスト等の様々な観点から、アジアNIEs、ASEAN諸国、インド、中国、ベトナムへと急速に拡大していった。「直接投資前線の拡張」である。先進国からの直接投資は受け入れ国にとっても正の外部効果をもたらす。直接投資によって余剰労働が吸収され、人的資本が高まり、経済発展が促されるからである。1990年代は新興国が段階的に高度経済成長への道を歩んでいった時代でもあった。

しかしながら、世界経済の拡大と新興国の所得増加を背景として消費が拡大し、世界的規模で必要以上の—奢侈ともいえる—消費が好まれるようになった。グローバル経済はこうした消費に拍車をかけた。もちろん、消費それ自体に善悪があるわけではない。しかし、より多くの消費を行うための原資獲得のために、ハイリスク・ハイリターンの財を取り扱う市場—不確実性の高い市場—が強く選好されるようになった。本来ならば、その不確実性の及ぼす危険性について十分な検討を要

⁷ 輸入に関しては2002年に米国からの輸入額を中国からの輸入額が上回った。

⁸ 小島（2003）を参照のこと。

する市場での取引が、何の検討もなしに行われるようになった。例えるならば、われわれはスタジアムの歓声に酔いしれながら、「ルールのないゲーム」に没頭していたのである。

専門用語に包まれた金融商品も、その本質は、流動性が低くなるほどハイリスク・ハイリターンであるという事実には尽きる。にもかかわらず、消費者（家計）においては、資産をうまく運用しさえすれば、労働（不効用）なしに所得が得られるかのような期待が形成され、高レバレッジの金融商品が好まれる事態が生じた。他方、生産者（企業）も、過熱する競争に生き残るため、短期利潤（利殖）の追求が重要視され、企業文化の犠牲を余儀なくされている。これはわれわれの望んでいた資本主義なのであろうか。

かつてゾンバルトは、奢侈を資本主義の源泉とみなしていた⁹。奢侈だけをもって新興国における資本主義の発生理由とするには無理があろうが、今日のグローバル資本主義が、消費者の奢侈と、いたずらに利殖のみを追求する企業経営によって引き起こされている側面は否定できない。冒頭に述べたように、本来、グローバル化はわれわれの生活を豊かにするはずである。しかし、危機がかくも深刻な事態を引き起こすに至ったのは、われわれ経済主体の中に、「地獄の沙汰もカネ次第」というような、ややもすると拝金主義的な発想が根底にあったからではないか。われわれはこのようなグローバル資本主義を望んでいたわけではない。

確かに資本主義の資源配分メカニズムは悪ではないし、参加者が少ない市場はビジネス・チャンスともいえよう。しかし、ルールが定まっていない未熟な市場での取引が、世界的な危機を及ぼすことを、われわれは深刻な問題として考えるべきである。次の節では、グローバル資本主義が陥った「闇」について、企業、政府、二つの経済主体について考察する。

2. 原因は何か—企業、政府の問題

(1) 企業の問題

経済学を学習した者に企業の定義を尋ねれば、異口同音に「企業とは所与の生産技術の制約の下で利潤を最大化する経済主体である」と答える。この定義は企業行動を数学的なモデルで記述する際には適しているが、かなり多くの、そして極めて重要な点を捨象している点を忘れてはならない。中でも、企業家のもつ「公共的な、奉仕的な精神」は、生産活動を通じて社会に貢献するという意味において、企業家が活動する市場の質に多大なる影響を与えるため、極めて重要である。

この「公共的な、奉仕的な精神」をマーシャルは「経済騎士道 (Economic Chivalry)」と名付けた¹⁰。

「戦争における騎士道が、君主や、国家や、十字軍の問題に対する非利己的な忠誠心を含むのと同じように、実業における騎士道もまた公共的な精神を含んでおります。しかしそれは高貴で、困難な事柄を、それが高貴で困難であるがゆえに行うことに喜びを見出すことも含んでおります。あたかも騎士道が、戦士が自らの甲冑を造ることから始めて、彼の熟練と智力、勇気と忍耐がもっともきびしい試練を受ける競技において、選び抜かれた甲冑を用いるように招くのと、同様であります。それは、安価な勝利に対する軽蔑の念を含み、助けを必要とする人々を援助することを喜ぶ心を含んでおります。それは途上であられる利益を軽蔑はしませんが、善戦によって得られる戦利品を、またはトーナメントの賞金を、それが証明する成果のために主として評価し、それが市場で、

⁹ Sombart (1922)邦訳書第5章を参照のこと。これに対してウェーバーは、プロテスタント以外の資本主義についてその発生を否定的に考えていた (Weber (1920)邦訳書 p.45 を参照のこと)。

¹⁰ Marshall (1907)を参照のこと。

貨幣によって評価される価値に対しては、副次的にしか評価しない戦士のすぐれた自負心を蔵しております¹¹。」

マーシャルは目先の利殖に執心するもの—彼曰く、愚かな手段で富を得るもの—に対して警句を發し、もっとも有能な企業家とは、困難を克服することによって得られた貨幣よりも、成功それ自体に価値があるとみなす存在であると考えていた¹²。そして、企業家が経済騎士道を身につけることで、経済活動ひいては人間社会の望ましい姿が実現できると考えていた¹³。しかし、マーシャルが経済騎士道の概念を提唱して100年、今日、企業に経済騎士道が醸成されているかと問われれば、残念ながらわれわれの資本主義は彼の理想とは異なった方向に向かっているといわざるを得ない。企業の社会的責任（CSR）が叫ばれて久しいが、それを提唱すること自体、企業に経済騎士道精神が欠落していたことの証左とも言える。

(2) 政府の問題

問題は企業だけにあるのではない。国際金融危機に対しては、G20 が1兆1千億ドルの資金をIMF や世界銀行をはじめとする国際機関に対して出資し、各国も財政支出によって景気の下支えを行っている。不景気における拡張的財政政策は、経済政策の常套手段ではあるが、財政負担を将来世代に転嫁して現在世代を救済するという発想は、はたして許される行為なのか。十分な検討がなされているとは言い難い。

ハロッドによれば、ケインズは政策決定が少数の知的な人々（知的貴族）によって決定されるべきであると考えていた（ハーヴェイ・ロードの規定概念¹⁴）。しかし、ハロッドは、いつの日か民主的政府がその支配から脱し、知的な人々の同意できないような仕方で行動する傾向はないだろうか、という点も同時に考えていた。つまり、民主政治による政策決定を採択するか、知的貴族による最もよく考慮された判断が支配力をもつべきであるかというディレンマにわれわれが直面することを予見していたのである。翻って現在をみると、経済政策は大多数の現状を救済するために多くが費やされ、広範な視点から政策について検討する機会は少ない。国際金融危機に伴う不況救済という美名の下、競争力のない企業までもが救済されるというモラル・ハザードも生じている。それも、将来世代の所得を犠牲にしての救済である。孫に美田を残せずとも、荒廃田を残してよい道理はない。

本節では企業と政府、二つの経済主体について問題点を指摘した。その共通的な問題は、過剰に利己的であるという点である。企業は短期の利殖に奔走し、政府は現在世代の救済に将来世代を顧みない。マーシャルのいう経済騎士道的な発想を各経済主体が持たない限り、グローバル化に伴う危機に対して抜本的な抑止力を求めることはできない。

3. 経済騎士道と士魂商才

マーシャルの経済騎士道が日本の企業や政府に定着する可能性はあるのだろうか。日本にはこれと似た概念として武士道（Chivalry）がある。新渡戸稲造は日本の武士道を世界に知らしめた嚆矢であるが、その中で、武士道においては「金銭なく、価格なくしてのみなされる仕事があることが

¹¹ 前掲書。引用は邦訳書 p.139 による。

¹² 前掲書。邦訳書 p.140 による。

¹³ 谷田（1971）、伊藤（2006）および根井（2006）を参照のこと。

¹⁴ Harrod（1951）邦訳書 p.222 を参照のこと。

信じられ¹⁵」、同時に、「奢侈は人に対する最大の脅威であると考えられ、しかして最も厳格なる質素の生活が武士階級に要求された¹⁶」と述べている。ここにはマーシャルのいう「貨幣によって評価される価値に対しては、副次的にしか評価しない戦士のすぐれた自負心」が読み取れる。

新渡戸は武士道を体系づける過程でその経済活動に言及しているが、武士道精神を企業活動にも生かすべきであると積極的に主張したのは澁澤栄一である。彼は自叙伝『青淵百話』において、武士道を実業道と読み替え就業すべきであることを述べ、士魂商才の重要性について言及した。

「苟も世に處し身を立てようと志すならば、その職業の何たるを問はず、身分の如何を顧みず終始自力を本位として須臾も道に背かざることに意を専らにし、然る後に自ら富み且つ榮ゆるの計を怠らざることこそ、眞に人間の意義あり価値ある生活といふことが出来よう。今や武士道は移して以て直に実業道とするがよい。(中略) 実業家は宜しく舊来の悪思想を一洗し去り、新時代の活舞台に於て古へ武士が戦場に驅馳したるが如き心掛を以て大に世界に活躍して貰い度い。余は武士道と実業道は何處迄も一致しなければならぬもの、又一一致し得べきものであることを主張するのである¹⁷。」

マーシャルが経済騎士道の概念を主張したのとほぼ時を同じくして澁澤栄一が士魂商才を述べている点は注目し得る。1910年代は列強の巨大資本が世界市場の8割を占め、資本主義の矛盾が顕在化した時代でもあった。列強各国は、帝国主義の名の下に資源獲得と消費市場の確保を目的とした植民地拡大を企図していた。1914年には第一次世界大戦が、1917年にはロシア革命がおこったが、その背景には、資本主義がもたらしたグローバル（地球）、マクロ（一国）、ミクロ（個人）それぞれのレベルでの経済格差と矛盾が存在していた。本来、経済活動が活発化することは、経済主体の厚生を高めることにつながるはずである。しかしながら現実経済をみれば、企業の多くが手段を選ばぬ狭量な利殖追及に奔走している。ルールなき資本主義が跋扈する中で、イギリスのマーシャル、日本の澁澤栄一が愁嘆したのも無理からぬ話である。当時の状況と1990年代のグローバル資本主義における利殖行動に奔走する企業の姿は大変酷似している¹⁸。

経済学史に不朽の名を残すマーシャルや、日本近代資本主義の父とも形容される澁澤栄一が企業家に対して「公共的精神の喚起」を促したにもかかわらず、今日、なぜ経済騎士道や士魂商才の精神が醸成されなかったのであろうか。

逆説的ではあるが、第二次世界大戦前の社会の特徴である「貧富の格差」が戦後是正されたことによって、逆に企業家の公共的精神が失われていったと私は考える。戦前の日本においては、起業する、すなわち資本家になるということは非常に難しかった。そうした社会的な制約の中で、代表的な企業家は、己の仕事に対して誇りを持ち、雇用者のみならずその家族、地域社会、ひいては日本の国益に対しても責任をもっていた。企業家は己の一挙手一投足が己を取り巻くすべての事象の浮沈に関連することを知っていた。企業それ自体が少ない時代である。もちろん、労働争議も頻発したし、悪質な強制があったことも事実である。しかし、仕事を成し遂げ、喜びを分かち合うという発想は現在よりも大きかった。三井物産を創設した時を振り返り、益田孝は以下のように述べている。

¹⁵ 新渡戸 (1899) p.97.

¹⁶ 前掲書 p.95-96.

¹⁷ 澁澤栄一 (1986) p.202-203 より引用。原文まま。

¹⁸ 歴史的な考察は渡辺 (2008) を参照のこと。

「金がほしいのではない、仕事が見たいと思つたのだ。一生懸命にやつた¹⁹。」

この短い文章の中には、仕事に対する公共的精神（経済騎士道、士魂商才）が読み取れる。戦後、様々な改革が断行され、資本の偏在は是正された。高度経済成長を経て、巷間では「一億総中流」という言葉も生まれた。起業も戦前とは比較にならないほど容易になった。現在は、グローバル化の恩恵によって海外から資金調達を行い、海外で操業している企業もある。その一方で、企業は単なる利潤追求機関に墮した感は否めない。経済格差があった時代を懐古するつもりは毛頭ないが、われわれは経済活動をする上で、とても大事なものを置き去りにしてきたのではないか。その一つがマーシャルのいう経済騎士道であり、澁澤栄一のいう士魂商才ではないだろうか。

温故知新という言葉がある。わが国の資本主義形成の過程では、公的精神の重要性を説いた企業家が数多く輩出されてきた。（企業家であるなしを問わず）われわれは経済の先達から学ぶ必要があるのではないか。グローバル資本主義を修正する鍵は、「制度化された経済学」を用いた経済政策ではなく、むしろ各経済主体の経済に対する考え方の修正にあると考える。

4. 結論—経済騎士道は日本から甦るか

グローバル資本主義が陥ったのは、経済主体が狭量な利殖活動に終始したことにある。「儲かればよい」「その場がしのげればよい」そのような考え方が、世界規模で蔓延している。奢侈は悪いことではないが、可能であってもそれを慎むことが全体としての均衡と調和を生む。日本には武士道という精神があった。そこでは、「金銭なく、価格なくしてのみなされる仕事」が最も尊いものだと説かれてきた。今日においては、対価のない仕事を生業とするのは不可能であるが、すべての仕事に対価を求めるような社会もまた望ましい社会とはいえない。

武士道に基づく日本の士魂商才は、マーシャルの経済騎士道に通じる美德である。そして同時に、グローバル資本主義の闇を粉碎する鍵でもある。CSRを売り文句とするのではなく、尊敬されることが世界経済に光をもたらすのではないか。商社をはじめ海外展開を行う企業は、単なる利殖に奔走せず、士魂商才をもって商談に臨むことが肝要である。もちろん、一敗地に塗ることもあるかもしれない。しかし、その姿勢は、商談成立以上の利益と尊敬をもたらし、長期的には国益をもたらすであろう。グローバル資本主義を修正するためには、経済騎士道、士魂商才をもった経済主体（企業、政府、消費者）が不可欠である。

国としての果たすべき役割は、経済騎士道、士魂商才をもつ企業家こそが尊敬に値する企業であるという経済風土を醸成していくことである。それは幼少期における金融教育、経済教育というよりも、むしろ道徳的教育といってよいかもしれない。

経済を構成しているのは人間である。武士道、士魂商才をいった精神性が培われてきたわが国日本。わが国から経済騎士道が甦る可能性は決して低くはない。

（参考文献）

R. F. Harrod (1951) *The Life of John Maynard Keynes*, London, 1st ed., 塩野谷九十九訳 (1967)

『ケインズ伝 (上) (下)』東洋経済新報社

International Monetary Fund (IMF) (2009) *World Economic Outlook 2009 April*, IMF.

A. Marshall (1907) "Social Possibilities of Economic Chivalry," *The Economic Journal*, March,

¹⁹ 長井 (1939) p.174.原文まま。

- 永澤越郎訳 (1991) 「経済騎士道の社会的可能性」『マーシャル経済論文集』岩波ブックサービスセンター.
- W. Sombart (1922) *Liebe, Luxus und Kapitalismus*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 金森誠也訳 (2000) 『恋愛と贅沢と資本主義』講談社学術文庫.
- M. Weber (1920) “Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,” *Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, 大塚久雄訳 (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫.
- 伊藤宣広 (2006) 『現代経済学の誕生—ケンブリッジ学派の系譜』中公新書.
- 斧田好雄 (1971) 「マーシャルの経済騎士道について」『文化紀要』5巻、弘前大学.
- 小島清 (2003) 『雁行型経済発展論 (第1巻) 日本経済・アジア経済・世界経済』文眞堂.
- 佐和隆光 (1982) 『経済学とは何だろうか』岩波新書.
- 澁澤栄一 (1986) 『青淵百話 (乾) (坤)』図書刊行会 (渋沢青淵記念財団竜門社 (1912) 『青淵百話 (乾) (坤)』同文館の複製).
- 杉本栄一 (1981) 『近代経済学の解明 (上)』岩波文庫.
- 内閣府 (2004) 『平成16年度経済財政白書』国立印刷局.
- 長井實 (1939) 『自叙益田孝翁傳』成武堂印刷所.
- 新渡戸稲造 (1899) 『武士道』岩波文庫.
- 根井雅弘 (2006) 『物語現代経済学』中公新書.
- 茂木創 (2008) 「外国からのリスク—海に代わる緩衝機能を」『上毛新聞』2008年11月27日.
- 渡辺利夫 (2008) 『新脱亜論』文春新書.